

# 山口県史だより

第25号／平成21年3月

特集 庚申信仰とひもじい様



江戸時代に造立された庚申塔（山口市堂の前町・万福寺境内）

## 特集 庚申信仰とひもじい様

科学技術が進歩した現代でも、妖怪や幽霊などの話題が完全に消え去ることはありません。消えないということは、現代人がそこに何らかの意味や役割を見出しているのかもしれない。庚申信仰と周防大島のひもじい様を例に考えてみたいと思います。

### ■はじめに

私たちは日ごろ「今日については」とか「つきが落ちた」という言い方をします。では、何が「つ（付）憑（いで）いている」のでしょうか。「つく」には「びったり一緒になる」の意味が、「つき」には「好運」の意味があります（『広辞苑』新刊 岩波書店）。良いものが「ついて」くれれば「物怪の幸い」ですが、それは「めったにならぬ幸運」のようです。

### ■憑（いで）ている話―庚申信仰―

表紙の写真は山口市堂の前町にある庚申塔です。庚申塔は一定の回数、庚申待を行ったときに造立されたものです。庚申待では六〇日に一回巡ってくる庚申の日に人々が集まって、飲んだり食べたりしながら徹夜で話をします。庚申待がどのようにして始まったのかは諸説ありますが、四世紀初めごろの中国の古典「抱朴子」には、次のようなことが書かれています。

人の体の中にある三尸という虫には、形がなく、実は靈魂・鬼神のたぐいである。この虫は宿主である人を早く死なせたいと思っている。

その人が死ねば虫は思いのままに浮かれ歩き、

死者を祭る供物を食べることができからである。そこで庚申の日になると、いつも天に昇って人の寿命を司る神にその人の犯した過失を報告する。罪の大きな者に対しては寿命から三百日を奪う。罪の小さな者に対しては三日（もしくは一日）を奪う（『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』中国古典文学大系第八巻 平凡社）。

また、永祿十一年（一五六八）に作られた「針聞書」には庚申の夜に「蛻虫」という虫が体から抜け出して閻魔王に告げ口すると書かれています（写真1 九州国立博物館所蔵提供・岡紀久夫撮影）。この虫は眠ると身体から抜け出してしまふので、自分の犯した罪を報告されたくないければ、庚申の夜は眠ってはいけなさと信じられていました。

昭和五十一年（一九七六）に刊行された「山口県民俗地図」（山口県教育委員会）によれば、庚申講も庚申塔も県内各地に見ることができまふ。庚申信仰の本尊はさまざまで、昭和十一年（一九三六）の「山村調査採集手帖」（山口県



写真1 蛻虫（『針聞書』より）



写真2 道祖神社と庚申塔（山口市）

史 資料編 民俗1」所収 橋浦泰雄著 山口県）には、阿東町嘉年居坂では「庚申を幸神とも書きサイノカミとも云う」とあります。庚申塔に刻まれているのも「庚申」の文字や「猿田彦」の文字、青面金剛の仏像などさまざまです。猿田彦は天孫降臨のとき道案内をした神様で、そのため道の神様（道祖神）としても祀られています（写真2）。

庚申待は、集まった人々が一緒に飲食し雑談することによって、帰属意識を強めたり、日ご



写真3 周防大島の山々

自分の持つて  
いる食べ物の  
一部をひもじ  
い様の墓に供  
えて行き過ぎ  
ると記してい  
ます（宮本常  
一 著作集40  
未来社）。

ひもじい様  
に似た話は、  
餓鬼・ダリ等  
の名で全国各

ろの不満を発散したり、村の中の情報を交換し  
たりする場であったことでしよう。また、「頼  
母子」によって経済的な互助を行うという役割  
もありました。

■憑かれる話―ひもじい様―

さて、庚申の虫はどんな人の中にもいると信  
じられていましたが、道でたまたま憑かれるも  
のについての言い伝えもあります。

宮本常一は「周防大島民俗誌」の「腹がへ  
る」という一節で、周防大島（写真3）の源明  
峠には「ひもじい様」の墓があると紹介してい  
ます。

ひもじい様は源明峠の頂上で命をおとした飢  
えた旅人です。この峠を越える者が頂上で「あ  
れ腹がへった」と思うとたちまち動けなくなる  
ほど腹がへるので、この峠を越える時、人々は

地にあります。

江戸時代の随筆にも、伊勢から伊賀へ越える  
道で、後ろから来た男に、「途中の道で、餓鬼  
に取り憑かれたらしく腹が減って一歩も歩けな  
くて大変困っている。何でも良いので、食べ物  
の持ち合わせがあれば、もらえないでしょうか」  
と頼まれたという話があります。この随筆の筆  
者は、このあたりに限らず、乞食などが餓死し  
た怨念が餓鬼になって、道行く者に取り憑くが、  
餓鬼に取り憑かれたときは、しきりに腹が減つ  
て、身体に気力がなくなり、歩行もできなくな  
ることが、度々あると書いています（『雲萍雜  
志』著者未詳 日本随筆大成〈第二期〉四 吉川  
弘文館）。

また、「憑物雑話」の「ダリ」という節には、  
山道を登るときは何でもかまわれないから、何か  
食べ物を持って行かないといけない。ダリに逢  
うといけないからという内容のことが書かれて  
います（『憑物』喜田貞吉編著 宝文館出版）。

餓鬼やダリに憑かれた時の症状は、激しい運  
動を長時間続けることによっておこる急激な低  
血糖症状（ハンガーノック）に似ています。マ  
ラソン選手が突然ふらふらになったり、倒れた  
りする姿を見たことはないでしょうか。

現代的な医学の知識がなかったころの人々は、  
「山道で急に動けなくなったら、何か食べると  
治る」と経験的に知り、その知恵を「餓鬼に憑  
かれたら何か食べると良い」「山に行く時には  
何でも良いから、食べ物を持って行かないとい

けない」という言葉で伝えたのではないでしょ  
うか。

また、山を登る際の知恵として岩国市錦町道  
立野の山中には休み石（写真4）があり、一気  
に山道を登って体力を消耗しないよう、自然に  
ペース配分ができるようになっていきます。

■先人の知恵

現代社会では「迷信だ」と切り捨てられがち  
な信仰や言い伝えにも先人の知恵が宿っていま  
す。庚申講は村人のコミュニケーションとスト  
レス発散、そして経済的な相互扶助のためのシ  
ステムであり、ひもじい様の言い伝えや休み石  
の存在は、険しい山道を歩く際の危機管理と言  
えるでしょう。

こうした信仰や言い伝えは、先人が互いの絆  
を確かめ合い、心の平穏を保ち、相互扶助や危  
機管理を行うための社会的な道具だったのかも  
しれません。  
（石永）



写真4 休み石（岩国市錦町）



## 歌会始 — 皇室と和歌

元皇宮警察本部長 小田村 初男

毎年正月に皇居宮殿の正殿松の間において歌会始の儀が厳かに執り行われます。歌会始の儀は年の初めの歌会として天皇陛下がお催しになる歌会のことです。宮中においては毎月月次歌会つきぎわのかいが催されているとお聞きします。

かつて、私の曾祖父楯取道明かとりみちあき（吉田松陰の甥、小田村久米次郎）は、台湾の教育に身を捧げ、芝山巖事件しざんがんじけん（明治二十九年（一八九六年）で殉職しましたが、台湾に赴任する前に一時期宮中歌御会講師を勤めておりました。

御存知のように、天皇陛下のお歌を御製ぎよせい、皇后陛下のお歌を御歌みうたといひます。歌会始の御製・御歌の他に、毎年元旦の新聞には、前の年にお詠みになった御製・御歌の内いくつかが発表されています。（今年も御製五首、御歌三首）

歌会始の歴史は古く、遅くとも鎌倉時代中期には行われていたとのこと。わが国の最初に記された和歌は、須佐之男命すさのおのみことがお詠みになった有名な

八雲立つ出雲八重垣妻こみに八重垣つくるその八重垣を

というお歌のことですが、その後歴代の天皇陛下は多くの御製をお詠みになっています。また、多くの勅撰和歌集が編纂されていることから、皇室と日本文化の精髓である和歌との深い関係が偲ばれます。

明治七年には一般の詠進が認められるようになり、多くの国民が和歌を詠進するようになりました。今年の歌会始には、二万二千七百首もの歌が詠進されたとのこと。両陛下は詠進された全ての歌にお目を通されると伺っております。このようにして、歌会始は天皇陛下と国民の心の通いあう貴重な機会となっております。

皇室をお守りする任務を負う皇宮警察においても、皇室の御慶事の際に、皇宮警察職員がお祝いの歌を詠進する慣わしがあります。平成十五年の天皇陛下の御古希と平成十六年の皇后陛下の御古希の際には、皇宮警察職員全員で奉祝の和歌を詠み献上いたしました。

その節に、私は、あらためて曾祖父楯取道明との縁を感じた次第であります。

（神奈川県在住）



## 史都萩を愛する会

本会は「萩の景観や民俗、自然をも含めた歴史総体が貴重な遺産であることへの認識を深め、史都萩にかかわる総合的な調査・研究と情報の交換・発信を行い、もって文化遺産の愛護・保存に寄与することを目的」（会則）とし、誇りある史都萩として子孫に受け継げる町づくりを目指しています。

事業として、年間四回の研究発表や情報交換のための例会と会報の発行を主軸として、現地探訪・講演録の発行など、十分とはいえませんが、三百余名の会員により一応の成果を挙げています。

「史都萩を愛する会」は、高度経済成長の進展によって史都の文化遺産の存続が危ぶまれ始めた時期にあたる昭和四十一年（一九六六）に創設され、多大な実績を挙げてきました。しかし、残念ながら世代交代などの事情が重なって、平成元年（一九八九）会報五十三号の発行を最後に休止状態になっていました。その後平成十三年（二〇〇二）、市民の強い要望により再興し、今日に至っています。

現在、拡充された萩博物館の開館により、拠点が確立しつつあります。また、市内各地域ごとの文化遺産の愛護・保存等の組織の発足もあり、今後本会の活動に大きい期待がかけられる状況になっています。

連絡先 萩市堀内三五五番地 萩博

物館内

電話 〇八三八・二五・六

四四七

会誌 「新・史都萩」



例会風景

## 写本の歴史的意義

下の写真は、長門一宮である住吉神社に伝わる文書を記録・保管するため、十五世紀後半に書き写した写本帖です。巻末には、大内政弘が原本と相違ないことを証明する文言と署名・花押を記しています。以後、この写本帖は、同社で大切に保管されてきました。

原文書が散逸し、この写本帖でのみ確認できる貴重な文書も多くあり、失われようとした史実を今に伝えているのです。（担当 今地・岡本・高橋）



大内政弘奥書



表紙

## 近世部会

### 防府の満願寺

満願寺は、真言宗御室（仁和寺）派。毛利氏の祈願寺として、安芸国吉田から萩へと行動をともし、かつては萩城内にありました。

『史料編 近世5』（文化、平成二十一年度刊行予定）には、同寺文書の一部を掲載します。この中には、祈禱をはじめとした行事や日々の出来事を記録した「日帳」があり、一年間の寺の活動について知ることができます。

（担当 河本・松島・宮崎・下向井）



安政7（万延元）年の日帳

明治維新部会

長州軍を苦しめた幕府軍

幕長戦争（四境戦争）ではミニエール銃を用い、散兵戦術を駆使した長州軍が幕府軍を圧倒しましたが、全てがそうではありません。

ミニエール銃やホーウィッスル砲を装備し、小隊編制を採用した幕府歩兵隊や歌山藩兵は、芸州口の戦いで高い戦闘能力を示し、遊撃隊等諸隊を中心とした長州軍を苦しめています。

『幕末維新4』では、幕長戦争を総合的・客観的に解き明かす史料を収録します。  
（担当 磯部・宮本・村里）



「長州再征軍進発図」（下関市立長府博物館蔵）

近代部会

北の大地へ北海道移住序章

明治新政府による開拓が始まったばかりの北海道。山口からの移住者が最初にその足跡をしるしたのが日本海側の増毛・留萌の地でした。

北海道支配地用掛森清蔵の指揮下、大津郡や厚狭郡から関係者が派遣され、母船式捕鯨や石炭採掘などへのチャレンジが始まりました。しかし、明治四年（一八七二）、支配地は北海道開拓使に引き継がれることとなり、計画は幻に終わってしまったのです。

（担当 浅川・木下・伊藤）



捕鯨基地の設置が計画された小平薬川河口附近の光景。上流部では石炭採掘が試みられた。

現代部会

線路から道路へ再生

山口市徳地と防府市を流れる佐波川の東沿いを通る県道三田尻港徳地線。かつて、そこには鉄道が走っていました。それが防石鉄道です。

昭和三十九年の鉄道廃止の際、地域の将来を考え、線路跡地の大部分は旧徳地町と防府市に無償で提供されることになりました。その後道路へと形を変えた線路跡地は、徳地と防府を結ぶルートとして、通勤・通学をはじめ、今も地域の交通を支え続けています。

（担当 津枝・山本・林）



県道三田尻港徳地線と旧上和字駅跡

民俗部会

『民俗編』編集集中

「上関大橋がなかったころ、子供たちが海峡をはさんで石を投げ」「上関の白粥」「室津の茶粥」とおらび（叫び）あつていてね。」

昭和十四年生まれ女性の語りから、狭い海峡を隔てた場所でも食習慣が違ふことや、四百年前の「日葡辞書」にある古語「Vouriララビ」が今も使われていることが分かります。

次巻『民俗編』では身近な事例から本県の民俗を解説します。

（担当 石永・古屋）



上関海峡（熊毛郡上関町・向こう岸が室津）

## 「史料編」、「通史編」の編さん

高等学校の日本史の教科書では、原始時代から現代までの政治・経済・文化などの歴史が、時代順に総合的に記述されています。このような歴史記述を「通史」と言います。

また、日本史の史料集には、このような歴史記述の根拠となる内政や外交に関する文書、日記などの史料が掲載されています。

同様に「山口県史」にも、大内氏、毛利氏の活躍や幕末維新期の激動から庶民の生活までを含めて、県内の政治・経済・文化などの歴史の流れを原始時代から現代までを通じて記述した「通史編」と、この記述の根拠となる史料を収録した「史料編」とがあります。「山口県史」では、時代ごとに「史料編」、「通史編」の順に刊行されていますが、今回はその編さんについてご紹介します。

〈史料編の編さん〉

(1) 史料の調査収集 「史料編」編さんのための重要な史料は、文書館や社寺、旧家など様々な場所に所蔵されているので、現地へ行って史料の



史料調査



写真右：くずし字の史料文  
写真左：筆写された史料文

調査、撮影を行います。新しい史料が発見された時などは、胸のときめきをおさえながら、慎重に調査を行います。

(2) 史料の筆写 収集した史料には、くずし字で書かれた史料も多くあるので、楷書に書き直し、一般読者が読めるようにします。

(3) 編集 原史料に忠実に掲載するため、その時代特有の文書作成の約束事に従って原稿を作成し、これをもとに「史料編」ができあがります。  
〈通史編の編さん〉

(1) 目次作成 本県の歴史を理解するため、どのようなテーマや内容を設定したらよいかについて、専門家が知恵を出し合って、目次の項目を決めます。

(2) 執筆 収集史料やその他の参考文献等に基づき、学術性や正確さに最大の注意を払いながら、一般の読者にも分かりやすく歴史記述を行います。まさに執筆者の腕の見せ所です。

(3) 編集 図表や写真、イラスト等も入れ、読者の理解が深まる構成となるように編集を行って、皆様のお手元にお届けします。皆様のお役に立つことを心から願っています。



入稿原稿



校正作業

## 県史刊行の

### お知らせ

▼今後の配本予定巻についてお知らせいたします。

「史料編 近世5」は、山口県の近世における学問と思想、教育、宗教、祭礼と芸能、工芸、文芸等の史料を収録する予定です。

「史料編 幕末維新4」は、江戸幕府の崩壊過程で重要な転換点となった慶応二年（一八六六）の幕長戦争（四境戦争）に関する長州藩側と幕府軍側の史料を収録する予定です。

「史料編 近代2」は、おおむね大日本帝国憲法制定時から第一次世界大戦終了までの、山口県の政治・社会・文化に関する史料を収録する予定です。

「民俗編」は、「総論」、「生きる場と暮らしを築く」、「変化の中に生きる」の三つに分類して、現代に見える民俗を手がかりに、山口県の過去から現代に至る暮らしの変化とその様相を提示します。どうぞご期待ください。

### こちら 県史編さん室

▼県史編さん過程の調査研究成果等を発表して、県史編さんに対する理解を深めていただくとともに、地方史研究の発展に寄与するため、研究誌「山口県史研究」を毎年三月に発行しています。

これにより、新しい研究成果や動向等も分かりますので、ご購入をお勧めいたします。

▼「山口県史」および「山口県史研究」のお申し込みは、左記あてにお願いいたします。

〒七五三―八五〇― 山口市滝町一番一号 山口県刊行物センター内  
山口県刊行物普及協会 電話（〇八三）九三三―二五八三

FAX（〇八三）九二二―九一三九

▼県史編さん室ではホームページを開設し、編さん事業の概要や既刊本等の紹介をしています。アドレスは左記のとおりです。

<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a193001/index/>

## 山口県史の構成・刊行計画（全42巻）

### 【通史編】 6巻

既刊 原始・古代  
中世  
近世  
幕末  
近世  
現代

### 【民俗編】 1巻

### 【史料・資料編】 33巻

既刊 考古1（原始）  
既刊 考古2（古代以降）  
既刊 古代（古代史料）  
既刊 中世1（記録）  
既刊 中世2（県内文書1）  
既刊 中世3（県内文書2）  
既刊 中世4（県内文書3・県外文書・文学資料）

既刊 近世1（政治1）  
既刊 近世2（政治2）  
既刊 近世3（経済1）  
既刊 近世4（経済2）  
近世5（文化）  
近世6（諸家文書1）  
近世7（諸家文書2）

既刊 幕末維新1（政治・経済1）  
既刊 幕末維新2（政治・経済2）  
既刊 幕末維新3（政治・社会3）  
幕末維新4（政治・社会4）  
幕末維新5（経済）

既刊 幕末維新6（軍事）  
幕末維新7（文化）

既刊 近代1（政治・社会・文化1）  
近代2（政治・社会・文化2）  
近代3（政治・社会・文化3）

既刊 近代4（産業・経済1）  
既刊 近代5（産業・経済2）  
既刊 現代1（県民の証言 体験手記編）  
既刊 現代2（県民の証言 聞き取り編）  
既刊 現代3（言論・文化・フランク文庫）

現代4（産業・経済）  
現代5（政治・社会）

既刊 民俗1（民俗誌再考）  
既刊 民俗2（暮らしと環境）

### 【別編】 2巻

統計  
年表・索引

### 山口県史だより 第25号

平成21年3月31日発行

編集・発行／山口県県史編さん室

〒753-8501 山口市滝町1番1号

TEL 083-933-4810

FAX 083-928-2705